

*



*



*



*

巻頭言

「午前の保育」と「午後の保育」

無 籐 隆

保育について新たな課題が次々に起きる。特に、預かり保育、保護者の保育参加、地域の人との連携、三歳未満児の親子への支援、あるいはまた地域の文化的素材や活動の導入等、子育て支援や地域に開かれた保育という理念の下で多様な活動が保育に含まれるようになった。そのよい点もあり、しかし、マイナスもあるように思われる。保育本来の働きを邪魔している面もあるだろう。

保育・幼児教育本来の部分の活動を主に午前中の時間の主力を担うという意味で「午前の保育」と呼んでみてはどうだろうか。それに対して、子育て支援や地域に開かれる保育を午後の時間に行われるという意味で「午後の保育」と呼んでみよう。不易の保育と流行

*



*



*



*

の保育という言い方で分けることも出来る。

「午前の保育」

本来、保育とはどうあるべきか、どうあることが可能なかと改めて問うてみる。その最良の部分とは何か。とはいえ、保育者が保育のセンスを持って努力すれば可能などころで実現することは何か。つまりは、私が訪問し、思い浮かべられるいくつかの幼稚園の保育の様子を見てみたとき、そこで子どもは何を行っているのだろうかということである。

それを、子ども同士が協同する中とともにする目標を目指して、活動していくことと、それを保育者が助け、支えていくことととらえることは出来ないだろうか。子どもの意図的目標志向的な協同活動を支援するのである。子どもたちが一緒に何かをしよう・達成しようとして、かなりの時間を掛けて、協力しあいながら、目標に向けて進む活動を行う。保育者はその活動を援助し、子どもたちの力で実現するように蔭の存在として助けていく。

子どもたちが邪魔をされずに、自分たちの考えで活動を進めていくのである。その目標はかなり遠くにあるものとなる。そうであって、困難に出会い、それを越えて、工夫していく意味が出てくるからである。また一人では適わないから、何人かで協力していく。さらに、子どもたちだけで可能になるとも思えないから、保育者が助力する。

幼稚園の三年間の保育は、年長児のそういった協同活動を可能にするための道筋として

*



*



*



*

とらえていくことができる。遊んでいるところから目標が生まれ、それを多少目指すという活動に転換するあたりから、その目標に向けての手順や手だてを子どもが意識して構築するようになる。さらに、長期の目標に向けていくつものステップを踏み、その都度の成果を自分たちの間で確認し、共有し、それに基づき、目標を組み替える。

ここでは、保育をいかに集中した活動、そしてその集中が持続するかということに焦点がある。数名から十数名の集団の緊密さをいかに保育者が可能にし、維持するかが問われる。

「午後の保育」

保育を保護者にまた地域に開いていく。集中した活動というより、様々なものや人との出合いを大事にしていく。地域の文化との関連を大切にして、その活動や素材や人材を保育に入れ込む。子どもの気分はリラックスしたり、家庭的な雰囲気であったり、刺激の面白さに興奮したりするだろう。いろいろなものや人や活動が可能であることに目が開かれていく。

保護者が保育参加する場合を考えてみよう。時間としては午前であっても、午後であっても、それはよいのだが。ともあれ、その保育が、子どもの集中と目標志向という意味で高いものになるはずがない。その意味では保護者の参加は邪魔になる。保育者の代わりを勤めるという訳にはいかない。多くの場合、子どもの様子をただ見ていたり、逆に手伝い

*



*



*



*

すぎたり、単に保育者の助手をすることになる。特定の子どもの親であることがかえって子どもの気を散らすこともある。しかし、そのよさもある。保護者が保育のあり方を学ぶという点とともに、子どもが様々な大人に出会う一環ともなる。

預かり保育の場合も、その保育は午前中の保育ほど密度の濃いものにはならないだろう。やや「薄目」であり、その代わり、家庭的な雰囲気を楽しんだり、異年齢の交流が豊かであったり、地域行事や家庭の家事に類した活動をあれこれ行うことが出来る。預かり保育に参加しないで家庭に戻る子どもが体験するだろう活動に類したことを可能にしようと考えるから、そういつたことに活動の趣旨は傾く。

地域の文化素材を入れ込む場合も午後の保育といった感じになっていく。子どもの力を引き出し、その新たな活動を構想し、作り出すところを育てるといふより、文化素材に馴染むということが主になるからである。例えば、編み物を活動に導入するとすると、その手だてを習うということに重みが置かれる。

午前の保育と午後の保育の相互の活性化

この二つが截然と分かれるという訳ではない。相互に連動し、刺激しあい、それぞれで得たことをさらにもう一方で活かすという関係が成り立つことが保育を豊かなものにする。力点がどこにあるのかにより、保育のあり方を見直す枠組みとしてみたいのである。

(お茶の水女子大学)